国際共修教育における異文化間コミュニケーション能力の育成

Developing Intercultural Competencies through Cross-Cultural Education

谷口　ジョイ*、谷口　正昭**
Joy TANIGUCHI and Masaaki TANIGUCHI

Today, the practice of cross-cultural education for multiethnic student groups with diverse languages and cultural backgrounds has been expanding in universities and colleges in Japan. However, there are many problems to be solved when Japanese students and international students interact in class. To improve the cross-cultural learning, students who do not share language, culture, and values need intercultural competencies, that is, skills related to global communication. This paper identified the problems that the participating students have in intercultural classes, and effective intervention to facilitate student's acquisition of intercultural competencies based on observation and semi-structured interview.

１．はじめに

近年，日本の大学では，学生の多様な言語・文化的背景を生かした教育実践が拡大している（末松，2019）．留学生と日本人学生がともに学びを深める取り組みは「国際共修」「多文化間共修」などと呼ばれ，双方の異文化理解を促す意義深いものである．しかし，こうした学習活動を実践する上での制約については十分な議論がなされているとは言えない．本研究では，日本人学生と留学生が相互交流によって学び合う授業の実践にあたり，どのような問題や課題が生じるのか，またどういった教育的介入が効果的であるのかを明らかにすることを主な目的としている．

日本の大学で学ぶ外国人留学生数は増加の一途をたどり，大学の更なる国際化を目指す政府は，さまざまな施策を展開している．これに伴い，大学教育のグローバル化も試行錯誤の段階を経て，新たな局面を迎えている．このような背景から，現在，多様な言語や文化的背景をもった学生や，そのコミュニティを教育資源として生かし，日本人学生と留学生が相互に学び会える機会を拡充しようという議論が高まっている（竹井，藤原，2020）．

一方，日本人学生と留学生が対話を通してともに学び合う授業の実践には，問題や課題が山積している．言語や文化，価値観を共有しない学生同士が，対話を通して学びの質を高めるためには，時間と労力だけでなく，異文化間コミュニケーション能力，すなわち，コミュニケーションに関わる特殊なスキルが要求される．こうした現状を踏まえ，本研究では，多様な言語・文化的背景をもった学生と日本人学生がともに学び合う授業において，どのような課題があるのかについて，参加観察及び事後想起インタビューに基づき検討することを研究課題の中核としている．

２．先行研究及び本研究の目的

ここでは，先行研究によって得られた知見について述べる．多くの国や地域において，教育の国際化は重要な課題であり，異文化間教育の視点から「国際共修授業」について，その理念や意義について論じられているが，文脈の違いから，日本の大学への適用可能性が低いものも多い．EU圏や米国，オーストラリアにおいては，1990年代から，多様な言語や文化をもつ学生によって構成される学習コミュニティに関する研究が行われており，理論的な枠組みや方法論の構築に関する先駆的な研究がなされている（Barett, et al., 2014）．

大学生の異文化間コミュニケーション能力（global, international, and intercultural competencies）について，米国の 9 大学において大規模な調査を行なった Sonia and Troisi（2013）では，留学生との交流やコースワークへの共同参加といった，キャンパス内での国際共修活動への参加は，学生の異文化間コミュニケーション能力の発達に大きく寄与し，海外留学を経験した学生と比較しても，その傾向が顕著であることを示唆している．

日本国内においても，2010 年前後から，学生の多様性がもたらす教育的効果についてその潜在的可能性が指摘され，実践例が共有されるようになっている．末松（2017）では，国内の大学における国際化教育に関する議論を概観した上で，異文化間コミュニケーション能力を育成する海外留学，及び国内における国際共修の意義について検討を加えている．また，留学生と日本人学生が共に学ぶ正課内外の授業や活動について，国内の現状を解説し，今後の

2021 年 5 月 26 日受理
*　情報学部　情報デザイン学科
**　静岡産業大学 情報学部

展望を述べている．

国内の国際共修に関する研究は歴史が浅く，限られた研究者や教育実践者が個別の事例や課題，展望について論じている段階である．また，先行研究においては，授業計画・実践・評価のサイクルの確立や学習成果の向上について論じられることが多く，本研究が扱う，日本人学生及び留学生双方の意思疎通場面で見られる課題や制約について論じた研究はまだ少ない．また，グループでの議論や交流の際，留学生と日本人学生の間で，どのようなコミュニケーション上の問題が生じるかについての記述は，筆者の知る限りほとんど行われていない．

本研究の目的は以下二点である．

(1) 日本人学生と留学生がともに学び合う授業において，双方のコミュニケーションにどのような問題が生じるのかを，参与観察により記述・考察する．特に，グループでの議論や協働作業の場面においての制約を分析する．

(2) 日本人学生と留学生が主体的に関わり合う授業の中で，双方の学生の「異なる言語や文化，多様性に対する意識」がどのように変化するのかを，面接調査によって明らかにする．

３．調査方法

本研究では，日本人学生と留学生が主体的に関わり合う教育活動の中で，どのような問題が生じ，また双方の学生の異文化間コミュニケーション能力にどのようなものであるのかを明らかにする．授業内に行われるグループディスカッションや協働作業の場面を観察し，さらに，事後想起インタビューによって，自身の異文化間コミュニケーション能力を内省し，その変化を探る．

(1) 参与観察：多様な言語，文化をもつ学生と日本人学生がともに学び合う複数の授業を長期にわたり継続して観察し，録画・録音資料からデータを得る．調査は第一筆者が静岡理工科大学で担当する授業で行い，15 週間にわたりデータを収集した．得られた資料から，グループ内での議論や協働作業においてどのような交流が行われ，どういった問題が生じているのかを把握し，具体的な学習活動の場で集められた「やりとり」に基づいて，その特徴を洗い出す作業を行った．授業の概要については以下のとおりである．

科目名：「英語コミュニケーション論」

受講者数：正規学部生 20 名（うち留学生はネパール 1 名，ベトナム 3 名の合計 4 名）

授業の概要：英語及び日本語によるコミュニケーションの諸相や特性を学び，他者とコミュニケーションをとる機会の充実を図る．また，グループ活動や口頭発表等を通して，自らを表現できるような教室活動を展開する．日本語と英語の共通性や差異に焦点を当て，非言語コミュニケーションなど個別のテーマについて議論を深める．授業で扱うテーマは，語用論，意味論，社会言語学，応用言語学，異文化理解等である．

以下，第6週の授業を例にあげ，どのような国際共修活動が行われたかを記す．この授業では「異なる文化を有する人とのコミュニケーションについて理解する」，「対話を通して、異文化について情報のやり取りや意見の交換をし、異文化体験を行う」という目標を掲げ，トランプを用いた異文化シミュレーション「バーンガ（Barnga）」が行われた．これは、グループ毎にルールが異なるトランプゲームを無言で行い，グループ間を学生が移動した際にも，ルールの説明がなされないままゲームが進行する，という活動である．学生は，この活動を体験した後，「ゲームをしている最中，どのような気持ちがしたか」「話せないことは，あなたの感情にどのように影響したか」といった内容についてグループで話し合う．その後「ゲームは現実世界では，どのような状況に対応するか」「ゲームを通して学んだ最も重要なことは何か」といった現実社会への応用可能性について，グループディスカッションを行い,その内容についてクラス全体で共有する．

Fig.1 異文化シミュレーション Barnga

また，この授業においては 学生同士で意思疎通を図る際の使用言語を指定していない．これは， translanguaging（Garcia and Li, 2014）という概念に基づいており．学生は自身の言語レパートリーの中から場面に応じた語彙や表現を戦略的・創造的に使用することが求められた．

(2) 面接調査：調査対象となる授業に参加する 20 名の学生への半構造化インタビューをコース中に 2 回実施した．上記の参与観察で得られた資料に基づき，事後想起インタビューを行い，どのような気づきがあったか，交流上の問題や障壁となったことについて聴取を行った．主なテーマとして，(1) 国際共修場面における課題 (2) 異文化間コミュニケーション能力の内省及び変化，について焦点が当てられ，必要に応じて，質問の補足や追加がなされた．面接は全て録音機で記録され，文字転記したものを用いて分析を行なった．得られたデータは，質的データ分析法

に基づき，質的データ分析ソフトウェア MAXQDA を用いてコード化，カテゴリー抽出，概念生成を行なった．

4. 結果と考察

4.1 国際共修活動初期

国際共修活動の初期においては，【対話の困難さ】*，【関係構築の困難さ】に起因する活動の停滞が見られた．

対話の困難さに関しては，日本人学生，留学生の双方が「教員から与えられた指示や課題を行う」という学習経験を積んできているため，対話を通した学びに困難を感じていることが明らかとなった．つまり，学生同士の交流を通して学び合う仕組みを経験していないことから，こうした活動に戸惑う日本人学生や留学生が少なくなかった．さらに留学生は，日本語の言語運用能力が不十分であるとの認識から，日本人学生との協働学習に対し，明確な見通しが立てられずにいたことが以下の発話からも見て取れる．

発話 1

S（留学生）：留学生が怖い，めんどくさいとか思われてるかなって．（中略）そう．だから、聞くのがすごい…本当にできないときしか聞かないんですよ．できれば聞かないようにするんですけど、もう仕方ないなって思って聞く．

発話 2

C（留学生）：うーんと，難しい言葉説明するときは，通じないとき多い．自分の日本語の能力はね，あんまり，なんか，普段，何，日常会話が普通にできるのが，専門の言葉になると，ちょっと分かりづらいところがある．

言語運用能力による意思疎通の難しさについては，H（日本人学生）も授業後に提出する内省レポートの中で以下のように指摘している．

私はＭくん（筆者注：留学生）とはおなじグループでたくさん会話する機会がありました．プレゼンテーションをするとき LINE で相談をされました．その時私は日本語でこうすればいいよと文章を送りました．そのあとＭくんからわかったと返信をもらいました．しかし私はＭくんが日本語が苦手であることが分かっていたため英語で本当に理解できたかと質問をしました．そしたらＭくんはなにも理解ができなかったという予想外の答えが返ってきました．私はとても驚きました．そこから私は英語でまた説明を始めました．しかし英語で会話が始まると私も理解することができない部分が出始めてしまいました．（中略）私がＭくんと意思疎通ができたと思い LINE を終えてＭくんの作ったスライドを見たとき私の思っていたように伝えることはできていなかったことを知りました．

この問題に対して，教員は，非母語によるコミュニケーションについて「どのような工夫がなされるべきか」「どのような言語環境を作り出すべきか」といったメタ的な問いを学生に投げかけることで，意思疎通のあり方に再考を促した．その結果，日本人学生は「やさしい日本語」，つまり母語を相手に伝わるよう調整して話す工夫を試みるようになった．また，留学生の日本語の誤用に関しても，形式的な面ではなく，発言の質に関わるような誤りに注意を向けるようになった．

さらに，日本人学生に関しては，相互に関係を構築するまでにある程度の時間を要するという問題に直面しており，【関係構築の困難さ】を感じていた．学生主体の「対話を通した学び」は，グループの各構成員が適切な役割を担い，活動の進捗状況を確認し合うなど，自律的にグループを組織する必要がある．この点に関しては，活動経験を蓄積することで解決が見られた．

発話 3

A（日本人学生）：やっぱいきなり，初対面でいきなりっていうのは無理です．

発話 4

Y（日本人学生）：そもそも、留学生と交流どころか，他の学生とコミュニケーションがない．

以上，活動初期の段階では，多様な言語・文化的背景をもった学生と日本人学生がともに学ぶ教育活動において，その活動形態に不慣れであることから，意見交換の場を効果的に創出することが困難であった．加えて，言語能力の非対等性の問題から，対話への主体的参加が一層阻まれるという問題があった．

4.2 国際共修活動後期

活動の後期に実施した授業観察，及び面接調査において，学生らは【ロールモデルによる気づき】が喚起されていた． 例えばＫ（日本人学生）は，グループ内である日本人学生が留学生と円滑に意思疎通を図っている場面を振り返り「なんか大事なのは（中略）、いかに相手に伝わるように簡単にその要点を押さえて話すかみたいなところだと．そこが大事なんだって．」と発言するように，他の学生の振る舞いから新たな気づきがもたらされていた．また，この気づきは次第に【新たな自己の創出】へとつながっていた．F（日本人学生）の内省レポートには「留学生が日本語で話すことを頑張ってくれていたことを実感し，また彼らの国についてなにも理解していなかったことに気づきました．日本に住んでいるからと言っ

* 【】内は質的データ分析法によって抽出した概念を示している．

て友達の国について何も調べず日本の当たり前を押し付けてしまっていたことに申し訳ないと感じました.」とあり，自主的な学びが促され，異文化間コミュニケーション能力の向上に結びつくような「気づき」が喚起されたことが分かる.

最後に，コース終盤においては，国際共修活動が【受容する場・される場】として学生の間で共有されていることが明らかとなった. 本研究への参加学生は，グループで行う協働学習の経験が乏しく，コース初期には言語や文化背景の異なる学生と議論の場をもつことに困難を感じていた．しかし, 活動後半には，複雑かつ多面的な視座をもって, 対話者を受容することが可能となっていた．具体的には,「A（日本人学生）はすごい優しいし，よく理解してくれるんですよ．なんにも言わなくても，あ、こういう問題が分からないよねって．ま，いいよ，ちょっと後で説明してあげるよって．何も聞かなくても.」や，「多分，A がいなかったら, 多分，大学辞めたと思う. すごい，一緒に頑張ろうよって，めちゃめちゃ言ってて，言われて．辞めますよって言ったら，絶対辞めないで，助けるからって.」といった留学生Sの発言にも見られるように，共感性をもって他者を受容し，支援できるようになっていた.

5. まとめ

本研究では，国際共修活動を記録，分析し，言語や文化的背景の異なる他者との対話を通じて異文化理解の向上に結びつくような学習が喚起されたかについて調査を行った. 調査の結果，活動の初期段階において学生らは, 教員からの指示や与えられた課題に取り組むという受動的な学習経験の蓄積により，対話を通した学びに困難を感じており，学生同士の交流を通して学び合う仕組みに戸惑う日本人学生や留学生が少なくなかった. これには，言語運用能力の制約やグループを自律的に組織する経験の乏しさが関連していた．一方，活動後期になると, 異文化間コミュニケーション能力の高い学生をロールモデルと捉え，対話により学びの質を向上させる手法に自ら気づきを得るようになっていた．こうした気づきにより，新たな解釈をもって自己の行動や価値観を変容させ，言語や文化の異なる他者を受容し，支援できる存在へと成長する過程が観察された.

指導者の介入については，メタレベルでの問いを投げかけることで，学生が事態を外側から客観的に捉えられるよう促すことが有効であった．現状を分析し，概念として整理し，工夫することで，多様な言語や文化を学びのリソースとして有効に活用することが可能となった.

今後，異文化理解を育成する教育体制の整備が期待されることからも，日本人学生と留学生が接点をもつ機会を授業の内外で創出することが肝要である．また, 本研究のような事例分析を重ねることで，学生の異文化間コミュニケーション能力の獲得プロセスをより精緻化し，国際共修を実践する上での課題やその解決方法について議論を深めることが求められる.

謝辞

本研究は，静岡理工科大学による「提案型教育研究費」の助成を受けています.

参考文献

Barrett, Martyn; Byram, Michael; Lázár, Ildikó; Mompoint-Gaillard, Pascale and Philippou, Stavroula, “Developing intercultural competence through education. Council of Europe” 2014. (accessed February 25, 2021), [available at http://www.academia.edu/3150166/Developing_Intercultural_Competence_through_Education].

García, O., & Li, W. *Translanguaging: Language, bilingualism and education*. London, UK: Palgrave Macmillan Pivot, 2014.

Soria, Krista M. and Troisi Jordan, “Internationalization at Home Alternatives to Study Abroad: Implications for Students’ Development of Global, International, and Intercultural Competencies,” *Journal of Studies in International Education*, **18 (3)**, 2014. pp. 261–280.

加賀美常美代「教育的介入は多文化理解態度にどんな効果があるか-シミュレーション・ゲームと協働的活動の場合」『異文化間教育』第 24 号（2006 年），76-91 頁.

末松和子「「内なる国際化」でグローバル人材を育てる ：国際共修を通したカリキ ュラムの国際化」『東北大学高度教養教育・学生支援機構紀要』第 3 号（2017 年），41-51 頁.

末松和子「はじめに」末松和子，秋庭裕子，米澤由香子編著 『国際共修–文化的多様性を生化した授業実践へのアプローチ』東信堂（2019 年）， i –vi 頁.

竹井光子，藤原美保「接触場面における日本語母語話者の言語行動の特徴と意識-国際共修カリキュラムへの示唆-」『広島修大論集』 第 61 号（1）（2020 年），1-15 頁.